



第12回 IIBC エッセイコンテスト

テーマ

私を変えた身近な異文化体験

テーマについて

相手が日本人であっても、外国人であっても、相手を理解し、円滑なコミュニケーションをはかることはとても重要です。高校生にとって身近なコミュニケーションの相手は家族や友人であることが一般的ですが、身近な家族や友人の間でも言いたいことが伝わらなかったり、相手が誤解したりしてはがゆい思いをしたことはあるでしょう。コミュニケーションでは相手がどのように受け止めるかが重要であり、自分の価値観を前提として伝えたことが、相手の価値観の中で異なって受け止められることはよくあることです。相手が同じ日本人であっても、同じ年であっても、自分の思いを相手に伝えることは簡単なことではないのです。

グローバル化が急速に進展する現在、高校生が近い未来に活躍する場は日本だけにとどまりません。活躍の舞台が世界に広がれば、異なる文化、習慣、宗教、そして異なる言語を持つ人々に自分の意思を伝え、また相手の意思を理解し、コミュニケーションをはかる能力が求められます。

今回のテーマである「私を変えた身近な異文化体験」は、将来グローバルに活躍するであろう高校生の皆さんに、コミュニケーションのギャップを乗り越えて、異なる文化を持つ人々とわかり合うことの大切さを見つめ、考える機会を持つことをねらいとしています。

したがって、ここでいう「異文化」は、外国や外国人のことだけを意味するわけではありません。相手が日本人であっても、同じ年であっても、自分と異なる価値観を持つ相手は「異文化」と考えることができます。**このような「身近な異文化」と出会い、そこで何を感じ、考え、学び、どのように「異文化」を持つ相手とのコミュニケーションギャップを乗り越えたかについて英語で記載してください。また、体験した異文化の紹介にとどまることなく、それらの体験から自身がどう変わったのか、そして今後どう成長していきたいかを表現してください。**ぜひ多くの高校生に「身近な異文化」について感じたことをフレッシュで柔軟な感性で、伝えていただけることを期待しています。

主催

一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会

後援

米国大使館

協賛

一般社団法人 日米協会

特別インタビュー

- 東京都立小石川中等教育学校 中田 淳予 先生、星見 友香 さん、呉 悠 さん
- AFS短期派遣プログラム 正岡 優一 さん、星見 友香 さん
- 岩手県立不来方高等学校 竹内 彩翔 さん
- クラーク記念国際高等学校 近 由梨子 さん
- 立教大学 経営学部 国際経営学科 教授・BBL主査 グローバル教育センター長 松本 茂 先生
- エッセイライティングワークショップ 講師の先生のコメント

応募規定

日本の国公私立高等学校、高等専門学校(1～3年)および中等教育学校(4～6年)に在学し、英語が母国語でない生徒お一人様、1作品とします。

本選

- ・学校単位での応募となります。審査対象になる作品の応募は1校あたり2作品まで。
- ・校内選考の実施は各学校のご判断にお任せいたします。

奨励賞

- ・学校単位での応募となります。
- ・対象になる作品の応募は1校あたり20作品(20名)以上。
- ・本選応募者は除きます。

使用言語

英語

応募作品

エッセイ 501語以上700語未満

(全ての応募作品にネイティブによるコメントをつけてフィードバックいたします。)

注意点

- ・自作未発表のものに限ります。・翻訳ソフトの使用は禁止します。・タイトル・カンマ・ピリオドは語数に入れません。
- ・エッセイは、手書きではなくWordファイルで作成してください。
- ・語数オーバー・不足は失格とし、個別フィードバックはいたしません。
- ・エッセイ内で他者作成の文章の引用が必要な場合は、引用箇所を印をつけ、必ず引用元を記載してください。記載のない場合には失格とし、個別フィードバックはいたしません。

応募期間

2020年6月1日(月)～9月4日(金) 17時まで

応募方法の詳細はエッセイコンテストサイトにてお知らせいたします。

応募フォームは6月1日(月)より受付予定です。

本選

- ・エッセイはエッセイコンテストサイト上の書式見本に従ってタイプしてください。
- ・エッセイコンテストサイト上の【本選応募用】応募フォームに必要事項を入力し、エッセイ作品(Wordファイル)を添付して送信してください。
- ・1校あたり2作品までご応募いただけます。2作品のご応募の場合、1つの応募フォームで手続きを行ってください。

奨励賞

- ・エッセイはエッセイコンテストサイト上の書式見本に従ってタイプしてください。

奨励賞の応募方法は、以下の2通りあります。

①エッセイ作品を全て印刷して、郵送または宅配便で送付。

(手順)エッセイを印刷し、全てのエッセイに連番をつけてください。

- ・エッセイコンテストサイト上の【奨励賞応募用】フォームに必要事項を入力し、送信してください。

- ・印刷した全てのエッセイを以下送付先へ郵送または宅配便で送付してください。エッセイは9月4日(金)消印有効です。

(送付先)〒100-0014 東京都千代田区永田町2-14-2 山王グランドビル
(一財)国際ビジネスコミュニケーション協会 IIBCエッセイコンテスト事務局 TEL:03-3581-4761

②応募フォームに作品データを添付して送信。

(手順)全てのエッセイ作品(Wordファイル)に連番をつけ、圧縮して1つのファイルを作成してください。

- ・エッセイコンテストサイト上の【奨励賞応募用】フォームに必要事項を入力し、圧縮したファイルを添付し、送信してください。

- ・応募フォームへ入力した【参加人数】とエッセイにつけた連番が同数であることを必ず確認の上、送付または送信してください。
- ・インターネットのシステム障害やメールアドレスの誤り、郵便事故などにより、個人情報および応募作品を紛失された場合の責任は負いかねますのでご了承ください。

問い合わせ先

(一財)国際ビジネスコミュニケーション協会 IIBCエッセイコンテスト事務局

E-Mail:iibc-essay@iibc-global.org

著作権

主催者に帰属します。

審査(本選作品対象)

審査

審査基準に基づきエッセイを総合的に評価します。
審査時には、学校名・生徒氏名は除き、エッセイ本文のみを採点します。



立教大学 経営学部
国際経営学科 教授・BBL主査
グローバル教育センター長
松本 茂 先生



桜美林大学 副学長
教授(国際経営)
異文化経営学会会長
馬越 恵美子 先生

審査員 (順不同)



北九州市立大学
教授(グローバル・ビジネス)
ジャパン・インターカルチュラル・
コンサルティング 社長
ロッシェル・カップ 様



公益財団法人 東洋文庫
専務理事
ハーバード大学アジアセンター
国際諮問委員
杉浦 康之 様



公益財団法人AFS日本協会
理事・事務局長
河野 淳子 様



(一財)国際ビジネス
コミュニケーション協会
専務理事
斎藤 真(審査員長)

審査基準

一次審査

IIBCエッセイコンテスト事務局がエッセイを評価します。

二次審査

各審査員が一次審査を通過したエッセイを評価します。(構成・表現力・文法/語彙など)

審査結果

入賞者に対して2020年10月中旬以降、応募いただいた先生のメールアドレス宛に通知の上、エッセイコンテストサイトにて入賞者および入賞作品を発表します。

表彰・賞品

本選:最優秀賞(1名) / 優秀賞(1名) / 優良賞(1名) / 特別賞(5名)

最優秀賞・優秀賞・優良賞を受賞された方には、海外短期派遣プログラムを副賞として贈呈いたします。
(ただし、諸事情により海外への渡航が不可能な場合などはノートPCの贈呈となります)

奨励賞:奨励賞に応募されたすべての学校と担当された先生に贈られます。

日米協会より本選応募作品の中から、国際理解や国際交流の観点で優れた作品3名に贈られます。

日米協会会長賞



一般社団法人 日米協会
会長
藤崎 一郎 様

※入賞された方については、後日、応募いただいた先生のメールアドレス宛に表彰式の日程をお知らせします。
※本コンテストに関わる情報は、随時IIBCエッセイコンテスト(https://iibc.me/essay_l2)にてお知らせします。



個人情報の取扱いについて

ご提出いただいたエッセイおよびご担当者様の個人情報は、コンテストの運営、入賞者への通知、応募者への参加賞送付に利用します。また、次年度のエッセイコンテスト、ワークショップのご案内書類やメールを差し上げることがございます。表彰式当日はご参加いただいた方々のお写真を撮影させていただきます。入賞作品(学校名・生徒氏名)や表彰式参加者のお写真はエッセイコンテストサイト内での発表、当方資料ならびに報道発表資料としても利用させていただくことがあります。お預かりした個人情報は、上記利用目的のために契約を締結した委託先に預託します。

インターネットのシステム障害やメールアドレスの誤り、郵便事故などにより、個人情報および応募作品を紛失された場合の責任は負いかねますのでご了承ください。個人情報の利用目的の通知、開示、訂正、追加、削除、利用の停止、消去等を希望される場合は、IIBCエッセイコンテスト事務局(03-3581-4761、土・日・祝日・年末年始を除く10:00～17:00)までお問い合わせください。

上記の個人情報の取扱いに同意の上、ご応募くださいますようお願いいたします。

個人情報保護管理者:(一財)国際ビジネスコミュニケーション協会 専務理事

第10回IIBCエッセイコンテストで2名の受賞者を出した東京都立小石川中等教育学校。 受賞した2人の生徒と中田先生に英語の学習についてうかがいました。



東京都立小石川中等教育学校
中田 淳予 先生
星見 友香 さん
呉 悠 さん

— エッセイコンテストに応募したきっかけと、 今回、受賞したエッセイについて教えてください。

中田先生:本校は中高一貫校で、中学生にあたる前期課程3年間と、高校生にあたる後期課程3年間の6年制の学校です。一般的に、高校1年生は新しい環境に慣れることで一年が過ぎていってしまいがちですが、本校では中高一貫校である利点を活かして、後期課程が始まる4年生は3年生までに積み上げてきた力を校内外で発揮する「飛躍の年」とらえています。英語科でも校外での活動に積極的に挑戦してほしいと思い、4年生の生徒たちが活躍できる場を見つけるために、英語の大会やコンテストに広くアンテナをはっています。その中で、IIBCエッセイコンテストが時期的にも夏休みの課題としてちょうどよいと思い、選択課題の一つとして提案しました。

星見さん:夏休みの宿題として中田先生からこのコンテストを教えてもらった時、1年生から学校の課題として定期的に取り組んできた英語のエッセイを、学校の外で発表するという事に挑戦してみたいと思い応募しました。今回のエッセイは、幼稚園の同級生だった障害を持つ友人との再会によって、意識をしないうちに生まれてしまう偏見があることに気づきました。その壁を取り除くことで、宗教、思想、文化の違いを乗り越えて世界を広げていくことができると考えたことについて書きました。

呉さん:私は日本で生まれ育った中国人です。日本では私自身が「外国人」であり、今回のテーマである「異文化」にふだんから興味を持っていました。そんな自分の思いを英語の文章にまとめて発表することで、多くの人に知ってもらいたいと思い応募しました。今回のエッセイは、日本と中国の二つの文化を持っていることで、自分のアイデンティティを見つけられずにいた私が、さまざまな文化を持つ人々が暮らすオーストラリアでの経験を通して、文化は違っても自分の立場に誇りを持って、お互いに理解しあおうとすることが大切だということ学んだという内容です。

— 英語のライティングは、 普段どのように勉強していますか？

星見さん:学校の授業でライティングに取り組む機会が多いです。1年生から英語の宿題として週1回ほど300語くらいのエッセイを書いてきました。最初は難しかったですが、4年生まで続けてきたことでエッセイを書くことに対する抵抗はなくなってきました。

呉さん:私も授業でやってきたことが英語のライティングの役に立っていると思います。とくに宿題で書いたエッセイは、ネイティブの先生が毎回添削してくださるので、とてもありがたいです。

中田先生:エッセイライティングについては、英語を習い始める1年次で、基本的な書き方を指導し、定期的に課題を出しています。4年生になるまでに50本ほどの短いエッセイを書いたこととなります。エッセイのトピックは、基本的には授業で扱うリーディング素材に関するものです。普段の授業では、英語の4技能をできるだけバランスよく伸ばしてあげたいという思いがあります。ある素材を聞いただけ、あるいは読んだだけで終わらせると流れていってしまうので、一回の授業で、まずは「聞く」、次に「読む」、そして「話す」、最後に「書く」ことを着地点にするというサイクルを作っています。この「書く」部分でエッセイを取り入れて、添削して生徒に返すまでが一連の流れになります。

星見さん:エッセイを書き始めた頃は、日記や学校の行事の感想など簡単なものでしたが、3年生になると死刑の是非についてとか、テクノロジーについてなど、だんだんと日本語で書いても難しいようなテーマがトピックになりました。私は難しいトピックの時は、まず調べたことを日本語で箇条書きや簡単な図にしてから英語でまとめていくという形で進めています。

呉さん:1年生からエッセイに取り組んできて、日記や感想なら英語で書けるようになりました。トピック自体が難しい時は、日本語と英語の両方でトピックについて調べてから英語でまとめるようにしています。4年生からは、あるトピックについて3分間でできるだけ多くの文章を書くという学習方法も習いましたが、これも役立っていると思います。



— 今回のエッセイを書くにあたって難しかったことや、 受賞された感想を教えてください。

星見さん:小石川フィロソフィーという選択式授業では、海外交流の授業を選択していて、オンラインでアメリカ、カンボジア、インドなど様々な国の高校生と交流したり、意見交換をしたりしています。それが今すごく楽しくて英語は好きな科目ですが、得意かと言われると自信がありませんでした。今回のエッセイコンテストも最初はワード数が500語以上と長いので身構えていました。ところが、考えているうちに伝えたいことがたくさん出てきて、わかりやすくとまとめる作業が大変になりました。1つのエッセイを書き上げたことは自信にはなりましたが、今回、受賞したと聞いた時は「まさか自分が」と驚きました。

呉さん:もともと英語は好きな科目で、検定等にも積極的に挑戦しています。日頃から自分自身が「異文化」であると感じていたので、今回のエッセイの「私を変えた身近な異文化」というテーマを見た瞬間に書きたい内容が頭に浮かびました。でも、500語以上の長いエッセイを書くのは初めてで、英語で自分の考えを正確に伝えることの難しさを感じました。より伝わりやすい文章になるように、なるべくシンプルな表現を使って書くことを心掛けました。今回、賞をいただいたことで自分の強い思いを伝えることができた実感し、とてもうれしかったです。

中田先生:このコンテストのエッセイを夏休みの選択課題にしたところ、4年生160人のうち約100人分のエッセイが集まりました。始業式に回収してからメチャまで数日しかなかったので、選考だけでも時間がかかり、添削はグラマーチェック程度しかしていません。今回の作品は2人がそれぞれ自分の感性で仕上げたものです。校内選考で100作品から2作品を選ぶのは大変でしたが、この2人の作品は、自分にとっての異文化という独自の視点で、自分の内面の葛藤や成長といったものを瑞々しく書くことができていて、きらりと光るものがありました。自信を持って選びましたが、2作品とも受賞したと聞いた時は、本当に感動しました。努力が報われたと感じるとともに、外部で客観的な評価をされるという経験は、2人にとって大きな成功体験になったと思います。

— IIBCエッセイコンテストに応募して、 よかったことはどんなことですか？

星見さん:自分が考えていることを人に伝えるために文章にすることで、自分の考えがまとまるという面もあったので、書くことの大切さを学ぶことができました。また、授賞式に参加させてもらった際は、トップレベルの高校の生徒や留学を経験した人も多く、校内だけでは気づかないことも校外の人とのコミュニケーションで気づくことができ、とてもよい刺激になりました。さらに、副賞のAFS短期留学でフィリピンでの語学研修とボランティアをさせていただくことになりました。この機会を活かして、受け身にならず、現地の方たちと英語で話したり触れ合ったりしたいと思っています。

呉さん:私は英語の文章にまとめることで、心の中だけにどめていた思いが整理されて自分の意思がより明確になり、「次は行動してみよう」と、次の一步につながるきっかけになりました。実際にこのエッセイに挑戦した後、英語のフォーラムやディベートコンテストなど、様々なことに挑戦しています。これからもいろいろ挑戦して、ライティングはもちろん苦手なスピーキングもブラッシュアップしていきたいです。授賞式で会った他校の受賞者は、みなさん国際社会に対する意識が高い人ばかりだったので、とても刺激を受けました。

中田先生:今回、2人が受賞したことは、同級生によい刺激を与えるきっかけにもなりました。実は、IIBCエッセイコンテストの他にも、4年生が中心となって意欲的に外部の様々なコンテストや大会に挑戦して入賞するなど活躍しています。このように、同級生が挑戦し結果を出している姿が周りの生徒の励みになり、「自分も挑戦してみよう」「私もうがんばりたい」と、生徒たちのお互いに高めあえる風土ができていると感じます。また、IIBCエッセイコンテストでは、各学校2作品まで応募できる本選以外に、団体で応募できる奨励賞の枠があるので、学校代表に選ばれなかった生徒の努力も無駄にならない点がよりよいところだと思います。奨励賞は選考の対象にならないものの、後日、フィードバックをもらうことができます。このフィードバックはとても丁寧なもので、参加した生徒たちの励みになりました。受賞する・しないに関わらず、生徒の成長の場として、非常に有意義な機会になったと思います。

— 「東京グローバル10」指定校ならではの 英語の取り組みについて教えてください。

中田先生:本校は「東京グローバル10」指定校ということで、国際理解教育に力を入れています。3年生全員が参加するオーストラリア語学研修と、5年生全員が参加するシンガポール海外修学旅行を大きな2つの柱として、帰国後の成果発表や、現地で行うプレゼンテーションなどの準備を年間を通して進めています。また、海外の提携校からの生徒も年間を通じて受け入れており、さまざまな国の生徒と交流があります。英語科でも外国人の教員が複数名在籍していて、個別にライティングの添削をする時間をとったり、わからないことがあればすぐ質問できたりするので、生徒にとっても心強い存在となっています。



— 「小石川フィロソフィー」とは、どんな授業ですか？

中田先生:小石川フィロソフィーは課題研究の選択式授業です。各教科を担当する教員がそれぞれ独自の講座を開き、現在は文系から理数系、社会系まで12講座あり、幅広い選択をすることができます。英語科では私が担当するディベート講座と、別の教員が担当する海外交流の2つの講座があります。星見さんは、海外交流の講座を選択しています。呉さんは数学の講座をとっているのですが、英語が得意なのでディベート講座の生徒に誘われて課外でディベートの活動もしています。

— 英語の4技能が求められる中で、 英語を指導する際に心掛けていることは？

中田先生:「英語を使う」訓練という意味では、生徒が思考して発話するための枠組みとして、ディベートが有効だと感じています。社会的なトピックを扱うことでリサーチする力がつきますし、制限時間の中で自分の意見を伝えるために考える力が必要になります。さらに、肯定側と否定側にわかれて意見を交換するディベートでは、自分の意見を述べるだけでなく、相手の意見に傾聴して理解することができないとキャッチボールになりません。この「聞く力」こそが、これからの時代にも求められる力だと思います。後期課程では、単に英語を話せればよいということではなく、ディベートという枠組みの中で、聞く力を鍛え意見のやりとりをする訓練にどんどん取り組んでいきたいと思っています。

— 星見さん、呉さんの将来の夢を教えてください。

星見さん:私は子どもの教育に興味を持っています。AFS短期留学でのフィリピンのボランティアもストリートチルドレンなど貧困層の子どもたちへの教育的サポートが含まれています。そのような経験の中で、子どもの教育に関わる仕事でやりたいことが見つけていきたいと思っています。

呉さん:将来なりたい職業は、まだ具体的には決まっていないのですが、今、グローバル化やIT化が目立っていて、これからは今までにない職業も生まれてくると思います。そういった動きにも柔軟に対応できる国際人になりたいです。

第10回IIBCエッセイコンテストで最優秀賞を受賞した正岡さん、優秀賞を受賞した星見さんから副賞のAFS短期派遣プログラムに参加した感想をうかがいました。

2018年度 最優秀賞

正岡 優一 さん
攻玉社高等学校(東京都)
(派遣先: イギリス)

2018年度 優秀賞

星見 友香 さん
東京都立小石川中等教育学校
(派遣先: フィリピン)



— まずは、AFS短期派遣プログラムに参加した率直な感想を教えてください。

星見さん: とても楽しかったです。いつもと違う環境で、とても新鮮な日々を過ごしました。私が留学したフィリピンには親日の方が多く、日本から来たことを伝えると、皆とても喜んでくれました。他国の方に日本文化を伝えるという活動を通じ、改めて日本のことを考えるきっかけにもなりました。



正岡さん: 語学面はもちろんですが、それ以外の個人としての成長も大きかったように感じます。普段日本で暮らしていると、学年や立場、所属している集団などでお互いを枠にはめあって人間関係が構築されることが多いですが、海外では“日本人・高校生・男子”程度の情報しか相手に与えられません。その条件下で相手とコミュニケーションを図ることが、僕にとってはとても刺激的なチャレンジでした。また、いろんなこ

とに興味を持って能動的に動いている自分を客観的に観察することで、自分自身の知的好奇心の強さも再確認することができました。改めてこの留学を可能としてくれた国内外全ての方々に感謝したいです。

— 6月に行われた事前オリエンテーションでは、どのようなことをしたか教えてください。

正岡さん: 事前オリエンテーションは1泊2日の合宿でした。班分けをし

てアクティビティを行うのですが、派遣先をバラバラにして班を組むんです。「学校名と学年を言わないように」との指示もありました。その時は現地で日本人同士が固まらないようにする意図があるのかと思っていたのですが、今考えるとそれは留学先での状況によく似ています。先ほども申し上げましたが、留学先ではお互いに名前や年齢もわからない状態からコミュニケーションを取りますので、その練習にもなっていたのかなと思います。その他、生活面での具体的なレクチャーを受けました。

星見さん: 班分けをされたあとに円になって皆でディスカッションをしたのですが、他の参加者が留学に対する目標をしっかりと持っていることに驚きました。私より年下の学生も明確なビジョンを掲げていて、現地に行く前の良い刺激になりました。



— 留学中はどのようなところに滞在されたのですか？

正岡さん: 僕は寮に滞在しました。3人の相部屋で、ルームメイトはベルギー人とイタリア人でした。初めての寮生活でしたが、仲良く過ごすことができました。寮では食事も提供され、掃除してくれる方もいました。



星見さん: 最初は日本人3人、フィリピン人のAFSスタッフ1人との共同生活でした。食事はみんなで分担し、食事も自分たちで準備します。

掃除もすべて自分たちで行ったので、日本で親が当たり前にしてきていたことが、決して当たり前じゃないことにも気づけました。ここでの滞在は1週間程度でしたが、少しは自立できたかなと思います。後半の1週間はホームステイでした。ホストファミリーは、お父さんお母さん、私より1歳上のお姉さんと1歳下の妹さんの4人家族でした。とてもフレンドリーな方たちで、安心して過ごせました。特にお姉さんとは、友達のように仲良くなって嬉しかったです。



— 印象に残ったプログラムやエピソードを教えてください。

正岡さん: ロンドンに行った際に、国会前でEU残留派の人たちがプラカードを掲げながら声をあげていました。僕はイギリスの政治に興味があり、前もって調べていたので、思い切ってデモ参加者にインタビューをしました。実は引率してくれたイギリス人の先生は離脱派だったのですが、衝突することもなく、お互いにリスペクトしながら話し合っていたことが印象的でした。テレビや新聞で見ていたニュースのど真ん中に実際に身を置くという、良い体験ができました。また毎日食事の時間に、AFSのスタッフや他の参加生と学問や宗教観などについてディスカッションしたことも心に残っています。こちらも、とても有意義な時間でした。



星見さん: ストリートチルドレンのボランティア活動が特に印象に残っています。事前にストリートチルドレンを取り巻く環境や、フィリピンの教育などについて話を聞き、その後、子供たちとゲームや折り紙をして交流を図りました。実際に会ってみると、子供たちはすごく明るく好奇心旺盛で、日本の子供たちと変わりませんでした。とはいえ、日本にはストリートチルドレンはいないし、目に見える貧困も殆ど感じません。学校に通っているかいないかだけで、子供達の将来にこんなにも違いが生まれてしまうのかと、色々考えさせられました。もともと子供の教育に興味がありましたが、改めて教育の重要性を実感しました。



— 他国からの参加者や現地の方との英語のコミュニケーションはいかがでしたか？

正岡さん: 幼少期に外国に住んだ経験はありましたが、最初の頃はよく「標準的な英語を話さね」と言われました。つまりもっと砕けた英語を話そうと。僕自身にもそのような自覚はあったので、日常会話での言い回しやリズムをより意識しました。日本語と英語の違いを再認識することができました。



星見さん: 私は留学経験もなく、英語も得意というわけではないのですが、フィリピンの方は常に聞く耳を持って接してくれました。伝わりにくいことでも汲み取って理解しようとしてくれる姿勢が嬉しかったです。そのおかげで、コミュニケーションが取れなくて困るということはありませんでした。もちろん、伝えたいことを伝えられないもどかしさがあったのも事実です。具体的な感想を伝えたい時も、平坦な言葉でしか表現することができなかった経験は、今後の勉強に対するモチベーションに繋がりました。

— 今後の目標などあれば教えてください。

正岡さん: もともと将来は海外での経験や語学を生かしたいと思っていましたが、今回AFS短期派遣プログラムに参加したことで、その気持ちがより強固になりました。具体的な職業についてはまだ絞り込んでいないので、大学に進学したら様々な分野について幅広く学びたいです。できれば大学生のうちにもう一度留学したいですね。もし留学が叶わなくとも、今回面倒を見てくださった学生ボランティアの方々のように、心の通じ合うような国際交流をサポートできたらと思います。

星見さん: ストリートチルドレンのボランティア活動などを通じ、恵まれた環境で勉強させてもらっていることを当たり前と思てはいけな、と改めて気持ちが引き締まりました。将来的に、貧困層や難民などあまり教育を受けられない層に何かをしたいという気持ちがありますが、今の自分には勉強することしかできません。ですので、まずは英語も含めて勉強を続けていきたいです。また今回、違う文化の中に身を置くことも楽しかったので、大学生になったらまた別の国へ留学してみたいです。



第11回エッセイコンテストで最優秀賞と日米協会会長賞をダブル受賞した竹内さんに、今回の作品を書いた体験についてうかがいました。



第11回 IIBCエッセイコンテスト
最優秀賞 受賞
日米協会会長賞 受賞
岩手県立不来方高等学校
竹内 彩翔 さん

— 今回IIBCエッセイコンテストを知ったきっかけと応募動機を教えてください。

今回応募したエッセイは、もともとはスピーチコンテスト(岩手県主催)の校内予選のために書いたものでした。残念ながら予選を突破することはできなかったのですが、先生が原稿の内容を評価してくださり、エッセイコンテストに挑戦してみたらどうかと声をかけてくれたんです。最初は迷いましたが、せっかくのチャンスなので挑戦してみようと思いました。

— エッセイのテーマは「私を変えた身近な異文化」でしたが、書きたいトピックはすぐに浮かんできましたか？

スピーチコンテスト用に書いた原稿のテーマが、両親の聴覚障害についてでした。両親との生活を通じて感じたことや経験したことを踏まえ、差別意識をなくそうというメッセージを伝えたいです。エッセイはその内容を活かしながら、「異文化体験」というキーワードを軸にしたものを書き直しました。両親は音のない世界、僕は音のある世界に生きています。双方の世界が身近にある環境で暮らしているからこそ気づけたことや、音のない世界にいる人たちの気持ちに寄り添うことの大切さをエッセイで表現してみようと思いました。

— エッセイを書いた際のプロセスを教えてください。

まず自分の感情の変化や揺れ、現在の考えに至るまでの過程を日本語で書き出しました。書き出してみると、それまで気付かなかった様々な発見がありました。伝えたいことを整理しながら先生と構成を考えました。先生には自分の感情的な部分もシェアしていたので、技術面だけではなく、内容についてもたくさんアドバイスをいただきました。

— どのくらいの期間でエッセイを仕上げましたか？

添削を繰り返したので、大体2ヶ月弱くらいかかったと思います。部活や他の勉強と並行していたので辛い時間もありましたが、周囲のサポートもあり、どうにか書き上げることができました。

※竹内さんのエッセイはこちら：www.iibc-global.org/iibc/activity/essay/2019 (本記事の取材は2019年11月に行いました。)

— 受賞時の感想を教えてください。

まさか最優秀賞をもらえると思っていませんでした。最初は全く実感がわきませんでした。表彰式で審査員の方から表彰いただいたときにようやく実感することができ、じわじわと喜びがこみ上がってきました。両親には最近になってようやくエッセイを見せたのですが、僕が普段どうしているかを考えて生きているのかが分かって良かったと思ってくれたようです。

— これまで英語のエッセイを書いたことはありましたか？

「英語表現」などの授業で、ライティングノートに定期的に自分の考えを英文で書いています。授業の課題は60ワードくらいでまとめることが多いので、ここまで長いエッセイ(700ワード)を書いたのは初めてです。

— 英語は好きな科目ですか？

英語は小学1年生のときから4年生まで塾で学んでいましたが、実は当時は嫌いでした。しかし中学に入り、小学生の時に勉強していた内容が英語の授業で活かせるようになってくると楽しくなり、どんどん好きになっていきました。得意なのはライティングです。分からない部分を調べながらじっくり取り組むことができる点が、自分に合っていると感じます。

— 最後に、今後チャレンジしたいことがあれば教えてください。

今回学んだことを活かしながら、さらに深みのあるエッセイを書けるようになりたいです。そのためにも、自分が考えていることを様々な言葉で表現する訓練を続けていきたいと思っています。また、僕はシャイなタイプなので、留学などを通じて外国の方々と積極的に交流し、スムーズに会話ができるようになりたいです。将来の夢はまだはっきり決まっていますが、障害のある方や生活する上で困難な状況にある方たちを、英語を使ってサポートできるような仕事に就きたいと考えています。



第10回IIBCエッセイコンテストで優秀賞を受賞した近さんに、当時の作品を書いた体験についてうかがいました。



第10回 IIBCエッセイコンテスト
優秀賞 受賞
クラーク記念国際高等学校(東京都)
近 由梨子 さん

— 第10回IIBCエッセイコンテストに応募したきっかけを教えてください。

IIBCが主催するエッセイのライティングワークショップに参加したことがきっかけです。そこで書いたものをさらにブラッシュアップして、コンテストに応募してみようと思いました。ワークショップでは先生がお手本を書いてくださったのですが、自分では思い浮かばなかったアイデアや書き方など新しい発見がいくつもあり、とても有意義な時間になりました。

— エッセイを書いた際のプロセスを教えてください。

アイデアを考えた後は、最初にボディ(メイン)となるパラグラフを書き、次に締め部分、そして最後に冒頭の導入部分を書きました。なぜこのような書き方をしたかという、ワークショップの先生が書いたエッセイの導入部分がとても面白かったからです。私も、「続きを早く読みたい!」と感じてもらえるような、読者を惹きつける書き出しで始めたいと思いました。エッセイは提出日まで、より洗練された表現にするため何度も辞書を引いて修正を繰り返しました。

— IIBCエッセイコンテストで優秀賞を受賞され1年が経ちましたが、自分自身の変化があれば教えてください。



実は私はもともと、ライティングに苦手意識があったんです。ですので優秀賞の受賞は、「私にもできるんだ!」という自信に繋がりました。最近ではさらにモチベーションが上がってきて、もっとたくさん書いてみたいと思うようになりました。英語全体に対する意識も変わり、より高いレベルの英語力を身に付けたいと考えるようにもなりました。

— 英語のライティング能力を伸ばすに当たり、何かしていることがあれば教えてください。

昼休みなどを利用して、エッセイを書いています。普段考えている

※近さんのエッセイはこちら：www.iibc-global.org/iibc/activity/essay/2018 (本記事の取材は2019年12月に行いました。)

ことや、授業で取り上げられたテーマで深掘りしたいトピックが出てきたら、手帳にメモしておいて、それをネタにエッセイを書きます。エッセイを書いていると新たな単語や表現を覚えることもできるので、リーディングにも活きていると感じています。今まで難しいと感じていたレベルの英語の本にも挑戦できるようになりました。更に本を読んでいて知らない単語が出てきたら意味を調べ、積極的にその単語を使用した文章を書いてみるなど、応用できるようになってきました。

— 学校の英語の授業はいかがですか。

現在、クラーク記念国際高等学校のインターナショナルコースに所属しているので、多様な英語の授業があります。ニュージーランドの大学の先生から直接レクチャーをもらう授業などもあり、たくさん刺激も受けています。プレゼンテーションの授業では、スピーチとプレゼンテーションの違いを学ぶなど充実しています。



— 授業以外で自主的に行っている英語の勉強法などがあれば教えてください。

英語の経済学の本を読んだり、ポッドキャスト等のニュースチャンネルをよく聴いています。新しく学んだことはきちんとメモに取り、自分の意見も書くようにしています。

— 今後、英語面でチャレンジしたいことや目標があれば教えてください。将来の夢を教えてください。

大学では、経済学を英語で勉強してみたいなと思っています。将来的には通訳など、英語を活かせる仕事に就いたら嬉しいですね。またその傍らでエッセイも書き続け、自分の意見を発信していけたらいいなと思っています。

第1回エッセイコンテストより審査員を務める立教大学松本茂先生に、応募作品の審査におけるポイントや英語でエッセイを書く意義についてお話をうかがいました。



立教大学 経営学部 国際経営学科
教授・BBL主査
グローバル教育センター長
松本 茂 先生

——審査をする際に大切にしているポイントを教えてください。

松本先生：一番は構成です。英語の語彙や文法などももちろん大切ですが、それよりもエッセイ全体の流れに注目しています。文脈に違和感がなく、ストンと落ちる内容になっているか。オリジナリティがあり、心に響くポイントがあるかどうか。オリジナリティといっても、何も特別な体験が必要なのではありません。一般的な出来事であっても、そこに新しい解釈を見い出して提示してくれたら良いのです。みんなが“当たり前”だと思って過ごしていることを、“当たり前ではない”として提起する。それは面白い試みです。そういった独自性が、読む人の心を打つのだと思います。

——応募作品をさらに良くするためのアドバイスがあれば教えてください。

松本先生：1回読んだだけで何を主張したいかわかる論理構成になっているということが、まず最低限のルールです。そこに、独自のエッセンスがちりばめられているということ。エッセイは、基本的には論証文です。ですから構成は、「序論」「本論」「結論」の流れで進めないとはいけません。まず、このエッセイにおいて何を主張するのかを述べ、次にその理由を書く。その中でサポートのマテリアルを入れ、結論で締めるというのが基本的な流れになります。この流れで構成されていないと、結局何が言いたいのかわからない文章になってしまいます。半ばまで読んで意味がわからないようでは、エッセイとしては成り立っていません。具体的には、まず“こう思う”という主張・結論を先に述べ、最初のパラグラフを読んだ時点で、ある程度その後の予測がつく構成にしましょう。次に自分の体験だけではなく、一般的な例をリサーチして盛り込みます。テーマが社会的な問題であればデータや専門家の意見を引用するなど、客観的なデータがあると説得力が増します。エッセイでは、論理と感情のバランスが大切で、心が強くなりすぎたはいけません。もちろん、バラエティに富んだエビ

ソードがあった方が面白いかもしれませんが、メインは論理をやることです。結婚式などの特別な場面では“感動”が必要であることもあります。エッセイでそれをする必要はありません。論理がまっすぐに流れるように書いてください。

——高校生がエッセイを書くことや英語で書くことの意義を教えてください。

松本先生：論理的なエッセイの書き方が身につけば、大学入試や大学の講義でも十分力を発揮出来るはず。大学入試での作文は長くても100ワードくらいの出題ですが、その評価項目も論理がきちんと流れているかがメインになります。また、社会に出たときに求められるのは論理的視点ですから、大学でもそこを重要視しています。そういった意味で、高校生がエッセイを書くことは非常に有意義であると思います。次に英語で書くことについてですが、英文を書くということは、英語を話す訓練に繋がります。実際に書いてみると、スペリングが分からなかったり、接続詞で迷ったりしてその都度調べるようになるので、英語の正確さもアップしていきます。しかし、もともとある和文を英文に書き直す作業だけを繰り返しても、一向に自分の考えを表現できるようになりません。ですから、毎日自分の意見を英語で書くと良いと思います。40～50ワード程度の短いもので構いません。毎週テーマをもって、例えば「スポーツ」であれば、1週間毎日違うスポーツについて書く。そこで構成力も養われますし、書き続けていけばスピードも速くなってきます。もちろん最初は全く書けないかもしれませんが、それで良いのです。“書きたいことが書けない”という体験をすると、自分には何が足りないのかということに注目できるようになり、学習時の意識が変わっていきます。

——身につけた英語をどう活用してほしいですか？

松本先生：最近では法律・会計事務所などでも英語を必要としていますし、新人研修の講師が全員外国人ということもあるようです。今後、英語が出来る人と出来ない人の差はますます開いてしまうでしょう。そういう時代ですから、逆に言えば英語が出来るというだけで、大きなチャンスを掴めます。どんな仕事においても、確実に可能性が広がりますから、目指す分野に関係なく英語を身につけ、自分の将来にうまく活かして欲しいと思います。

——エッセイコンテストに参加する高校生にメッセージをお願いします。

松本先生：語学習得においては特に、いかにモチベーションをキープするかが重要になってきます。そしてそのためには、色々な目標を作ることが大切です。ただ単純に英語を読んだり聞いたりする学習だけでなく、実践の場で自分の力をどんどん試してみたいと思います。TOEIC Programなどの試験を受けるのと同じように、エッセイコンテストも目標のひとつとして捉え、挑戦してみてください。

(本記事の取材は2018年2月に行いました)

＼ぜひ、この機会に！／

高校生対象

エッセイライティングワークショップ (東京・大阪) 参加者募集

本コンテストへの参加を予定している高校生を主な対象に、英文エッセイの書き方を学ぶワークショップを開催いたします。東京・大阪にて講師の先生から、日本語にはない英文エッセイのルールなど、英文エッセイを使用する様々な場面で役立つ内容を学びます。エッセイコンテストへの参加を予定している生徒がいらっしゃいましたら、ぜひこのワークショップをご活用いただけますよう、ご紹介いただければ幸いです。

▶ [ワークショップの詳細は同梱のチラシをご覧ください。](#)

講師の先生からのメッセージ

東京



Specially Appointed
Associate Professor,
Nerys Rees

立教大学 経営学部
国際経営学科



Assistant Professor,
Mona Syrbe

立教大学 経営学部
国際経営学科

The IIBC essay contest workshop provides students with an opportunity to learn about how to structure a narrative essay. It helps students understand the different parts of an essay and explains key ideas to focus on when telling a story. Students have an opportunity to work in small groups with other students from all over Japan and are also given one on one guidance for developing their own writing by an instructor. While the workshop is intensive and covers a lot of material, it is always fun and rewarding as students find their own voice to tell their own stories. We look forward to having you join us in 2020.

日時

2020年7月22日(水)
10:00 集合/
16:30 終了予定

場所

(一財)国際ビジネス
コミュニケーション協会 会議室
東京都千代田区永田町2-14-2
山王ランドビル

丸の内線・銀座線
「赤坂見附駅」徒歩2分、
半蔵門線・南北線・有楽町線
「永田町駅」徒歩4分

大阪



Lecturer,
Jeremy McMahon

近畿大学
法学部



Lecturer,
Richard Leigh Harper

大阪大学
外国語学部

Hello students! Come and join us at our workshop. If you have essay ideas and English writing ability, we'll show you ways to get the best out of your skill. We'll look at how to come up with ideas and details for a topic, and how to write them down in a strong essay structure. We'll work one-on-one with you to give you feedback and encouragement, and you can share ideas and complete activities with other students. You'll end up with a great essay you can enter in the contest. We look forward to seeing you!

日時

2020年7月29日(水)
10:00 集合/
16:30 終了予定

場所

(一財)国際ビジネス
コミュニケーション協会 会議室
大阪府大阪市中央区博労町3-6-1
御堂筋エスジービル

御堂筋線・長堀鶴見緑地線
「心斎橋駅」徒歩3分、
御堂筋線・中央線
「本町駅」徒歩4分